二〇二六年度　桐朋女子中学校入学試験　（B入試）

筆記試験（国語）

受験番号

氏　名

【注意】

一、問題冊子が配られても、開いてはいけません。

二、問題冊子は1ページから18ページまであります。

三、「はじめてください」と言われたら、まず、問題冊子の表紙と解答用紙二枚に、それぞれ受験番号と氏名を書きなさい。

四、答えはすべて解答用紙に書きなさい。

五、問題冊子に書きこみをしてもかまいません。

六、「やめてください」と言われたら、すぐに筆記用具をおき、解答用紙も問題冊子も表を上にして、机の上におきなさい。

七、試験時間は四五分間です。

一、次の①～⑩の――線部のカタカナを漢字に直しなさい。また、⑪～⑮の――線部の読みをひらがなで答えなさい。

① この地域のキコウは温暖だ
② パソコンをシュウリに出す
③ 高いギジュツを持つ
④ 今月のヤチンを支払う
⑤ すぐにシャザイする
⑥ テンネンの資源
⑦ テイヘンの長さを測る
⑧ 意見にキョウカンする
⑨ 犯人をホウイする
⑩ 朝からグアイが悪い
⑪ 長い会談を終える
⑫ 友だちと背くらべをする
⑬ 節穴が多い木材
⑭ 必死の形相
⑮ 美しい模様だ

二、次の(1)・(2)の問いに答えなさい。

(1) ①～⑤の熟語と同じ構成の熟語をそれぞれア～エから一つずつ選び、記号で答えなさい。

① 寒暖	ア	長短	イ	雨水	ウ	安心	エ	読書
② 観戦	ア	左右	イ	発病	ウ	幸福	エ	市営
③ 広大	ア	多少	イ	温和	ウ	白鳥	エ	登山
④ 夜空	ア	帰国	イ	鉄橋	ウ	人造	エ	善悪
⑤ 腹痛	ア	親切	イ	土地	ウ	県立	エ	温室

(2)　①～⑤は植物に関する慣用表現です。慣用表現の下に記した意味となるよう空らんに入るものをア～コから選び記号で答えなさい。

①（　　）役者　――　演技があまり上手ではない役者のこと。
②（　　）に風　――　相手にさからわずやさしくあしらうこと。
③（　　）の大木　――　からだばかり大きくて何の役にも立たない人のこと。
④（　　）にうぐいす　――　取り合わせがよく、仲がよいこと。
⑤火中の（　　）を拾う　――　自分の利益にならないのに他人のために危険をおかすこと。

ア　なす　　イ　さくら　　ウ　うめ　　エ　ふじ　　オ　だいこん
カ　くり　　キ　やなぎ　　ク　かき　　ケ　うど　　コ　たけのこ

三、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。ただし、字数制限のある問いに答える場合、「、」や「。」等も一字と数えます。

次の物語に登場する「呼人（よびと）」は、ある種の動物、虫、植物、自然現象を自分の意志とは関係なく呼び寄せてしまう人のことである。そのことが原因で定住することができず、「呼人」は旅をする生活をおくっている。本文の主人公である中学一年生の「くいな」は、鳥の「呼人」である。

くいなが鳥の呼人だとわかったのは、生後九か月のとき。だから呼人としてはかなりのベテランだ。親は、呼人の人権とかでけっこう活動しているタイプ。

くいな自身は、そういうイベントや勉強会には、あんまり関わらないようにしている。母親は、「いつか興味が出たら参加してみてね」といっているが、大人になっても自分がそういうものに興味を持つ人間になるのかどうか、①ちょっとあやしい。

森を抜け、少しひらけたところに出ていくと、人が二か所に集まっていた。木が少ない空き地みたいなところにレジャーシートをしいたり椅子を組みたてたりしている人たちと、ちょっと階段をのぼっていった展望台に集まって、双眼鏡を手に空や木々を油断なくチェックしている人たち。

双眼鏡と、三脚と、カメラと機材と。鳥のウォッチングのために集まった人々。

くいなには、この人たちの目的がさっぱりわからない。

そんなに鳥が見たいなら、画像検索すればいいのに。いまの世の中、いくらでも写真が出てくる。さあほら、みんなが一人一台持っている、そのスマホでさ。

「高橋さん、おはようございます！」

どことなくⅠ物々しい雰囲気の中、若めのおじさんがひそひそ声であいさつしてきた。

鳥をびっくりさせないように、この場にいる人たちはみんなひそひそ声でしゃべっている。ボラン・ティア子ちゃん、もとい高橋さんも、「おはようございますー」とひそひそ答えて、どうですかとか、ぼくもさっききたところでとか、早口にしゃべっている。

「その子が、例の」

「そう！　くいなちゃんです！」

くいなはうんざりしながらも、礼儀正しく頭を下げた。

②どんなに機嫌が悪くても、くいなはそれを前面に出して、大人たちをおびえさせたりはしない。まわりにいるのはわがままをきいてくれるような身内じゃなく、他人だから。

「くいなちゃんは鳥を寄せるの。だからぜひ、ここにつれてきてあげたくて！」
それをきいたおじさんは、ちょっと複雑な表情をうかべた。
くいなが呼人だと知ると、たいていの人はこういう顔をする。とまどったような、［A］。はじめましての呼人にも気さくに話しかけようとするんだけど、へたなことをいったら「失礼だ！」と怒られるんじゃないかと不安がる。
おびえる必要はないのに、と、くいなは思う。
くいなは、ちょっとくらいじゃ怒らない。
まあ、くいなのお母さんは、ちょっとしたことですぐ怒るけど。
「くいなちゃん、はじめまして。じつはね、ぼくにも呼人の知り合いがいるんだ」
「あら、そうだったんですね」
ティア子ちゃんはうれしそうに答えたけれど、くいなは「はあ」って感じだった。
知り合いがいるから、なに？
呼人は嫌われ者だけど、ぼくは嫌ってませんよーって、いいたいわけ？
……なんて、思っていても、くいなはいわない。
ちょっとくらいじゃ怒らない、をモットーにしているから。
「とにかく、今日は楽しんでいってね」
「どうも」
くいなは、にこやかなふうをよそおってやりすごした。
くいなはお母さんとはちがう。失礼な相手でも、基本的にはスルーする。
ベテランの、よくできた呼人なのだ。

「ボラン・ティア子ちゃん」と、くいなが心の中で呼んでいる高橋さんは、「わたしは高台にいるから、いつでもきてね」といいのこし、さっさと仲間の集まっているほうへ行ってしまった。くいなをおいて。くいなの面倒を見るのが、あの人の仕事なのに。

ため息をつくけれど、やっぱりここも、スルーだ。

くいなはあくびをしながら、レジャーシートや椅子をひろげてすわっている人たちをながめた。みーんな大人だ。おじさんとおばさん。あと、親の趣味につきあわされた小さな子ども。たまに若い人もいるけど、大学生くらいで、中学生くらいの子はいない。

いや。ひとり、いた。

やっぱり保護者につれてこられたのか、ひとりでレジャー椅子にすわって、大きな本をひざの上にのせてながめている。くいなはその子のほうへ、てくてく歩いていって、あまったレジャー椅子を指さし、「すわってもいい？」と声をかけた。

その子は、ボブカットにした髪をゆらしてくいなを見上げ、「いいよ」といってページをめくった。カラフルなイラストがたくさん入った大きな本だ。頭の上に小さなライトをつけて、その光をたよりに読んでいる。いかにもアウトドアっぽい装備だけど、駆使している本人は＊真正のインドア派オーラをはなっている。

「目、悪くならない？」

「暗いところで読むと目が悪くなるっていうの、デマらしいよ」

「え、まじで？」

「知らないけど」

その子は顔を上げ、となりの椅子におさまったくいなを見た。

「わたし、真帆」

「くいな」
「くいなも親につれてこられたの？」
「親じゃなくて、ボランティアの人にね」
くいなは［　B　］でいった。
「あたし、呼人だから、あちこち旅しないといけないの。で、子どもの呼人には、ボランティアさんが保護者代わりになってくれるんだけど、その人の趣味がバードウォッチングだったらしくて、このざま」
「③おたがい大人にふりまわされてるねえ」
「まったくね」
くいなは真帆と目をあわせて、くすくす笑った。
展望台で、わあっと静かなさざめきがわきおこった。さっそく鳥がきはじめているらしい。くいなは真帆に「なんの本読んでるの？」ときいた。
「ああ、課題図書。あたし不登校だから、オンライン授業受けてるんだ」
「あたしもオンラインで勉強してるよ」
「あ、そっか。呼人だもんね。何年生？」
「中一」
「いっしょだ」
ふたりはどんな授業をうけているのかでちょっと盛りあがった。近くにいた大人たちはカメラを持って展望台にダッシュしていったけれど、くいなも真帆も、どちらからも「鳥を見にいこうよ」なんて言葉は出てこなかった。
「それはなんの本？」
「人類学の本を子ども向けに書きなおしたやつ。これを読んだら大人向けのむずかしいほうに挑戦（ちょうせん）するつもり」

「人類学ってなに？」
「うーん。そもそも人間とはなにか？　みたいな学問かな。この本によると、もともと人間は森に住んでて、狩猟（しゅりょう）採集しながら暮らしてたんだって」
「ああ、サルだったころの話？」
くいなはイラストがたくさん入った本を受けとって、ぱらぱらめくった。少し日が出てきたので、なんとか読める。真帆は頭の上のライトを消した。
「ううん。二十万年前には、うちらの先祖はすでに現代人と同じ状態に進化してたらしいよ。でも、しばらくはほかの動物と同じように、森で暮らしてたの。動物捕（と）ったりくだもの採ったりしながらね。道を覚えたり、食べられるものを覚えたりしないといけなかったから、わたしたちよりよっぽど頭使ってたし、体力もあったんだって」
「へええ」
④ちょっと意外だ。なんとなく、人間はだんだん頭がよくなっていったと思っていた。
でもたしかに、電車とかでスマホをぽちぽちたたいている人の顔は、あんまり頭がよさそうには見えない。
「人間が定住するようになったのは、ほんとに最近。はやいところで一万年とちょっと前くらいからって、この本には書いてある」
「それって最近なの？」
くいなが笑うと、真帆はまじめな顔でうなずいた。
「二十万年も旅してたんだから、最近でしょうよ」
あ、そうか。
定住する前って、人間もみんな旅をしていたんだ。【　X　】みたいに。
「やっぱり、進化して農作業のほうがいいことに気がついて、定住することにしたんだね」

「えー。うーん。それはどうだろ」
真帆は首をかしげて考えこんだ。
「その言い方だと、なんだか農耕のほうが優れてて、狩猟採集のほうが劣ってるって感じしない？」
「そうじゃないの？」
「そうともいいきれないかもね」
真帆は言葉を選ぶようにゆっくりと話した。
「だって、どう考えても森で暮らしてたほうが、人間は幸せだったんだよ。道具とか作るための木はたくさんあるし。肉とか野菜とかくだものとか、いろんな種類のものをバランスよく食べられるしさ。でも、毎日畑を耕してたら、小麦とか数種類の野菜しか食べられなくなっちゃう。だから農耕がはじまったとたん、人間は栄養失調になりやすくなったらしいよ」
……（中略）……
くいなは、真帆に本をかえしながらつぶやいた。
「なんで、旅するのやめちゃったんだろう」
「そうだね。なぜだろう」
真帆は［　C　］で考えはじめた。あ、いや、べつに、と、くいなは手をふった。
「そういうもんかもしれないし。旅ってけっこう面倒くさいから、定住したほうが楽だよね、やっぱ」
「そうかな。定住するのが普通だとは、わたしは思わないけど」
くいなはちょっとおどろいた。真帆はまじめな顔でそういっている。
いつもだったら、くいなはちょっとだけ、真帆の言葉にムカついていたかもしれない。旅をするのはめんどい、定住したほうが楽だってことを――ほかでもない、呼人の――自分がいっているのに、それを否定するのは、なんてい

うか……きれいごとっぽくきこえるから。

そんなことないよ！　旅だっていいことがたくさんあるよ！　って、お母さんやお父さんは簡単にいう。呼人も、呼人じゃない人も、なにも変わらないよ、って。

でもそういうのって、なんていうか……ぜんぜんわかってないなって、思ってしまうのだ。

変わらないわけないじゃん。

呼人とそうじゃない人が、本当にまったく同じわけがないじゃん、って。

だけど真帆には、そういう「きれいごとっぽさ」がなかった。

うそっぽさがない。

「家や巣を作らない動物って、けっこうたくさんいると思うんだよね。その日暮らしで旅をするほうが多数派だと思う。哺乳類はとくに。まあ、イメージだから、ちゃんとデータで比較してみないとわからないけど」

「でも、人間と動物じゃ、そもそもちがうじゃん？」

「なにいってんの？　さっき、人間は特別じゃないっていったでしょ？」

真帆は［D］でいった。

「人間だって動物だよ。百パー、野生です」

思わず、くいなはくすくす笑ってしまった。

ほんとだ。そうかも。

高台ではバシャバシャとカメラを切る音が絶えなかったけれど、日が昇りきって早朝って時間でもなくなると、バードウォッチャーたちが‖三々五々‖もどってきて、ティア子ちゃん、もとい高橋さんが、くいなを見つけてぴょんぴょん飛びはねた。

「くいなちゃん、どうしてこなかったの？　すごかったんだから！　ホトトギスにアカゲラに、モズとエナガがいっ

ぺんにきたのよ！　あとで写真を見せてあげるからね」
「あ、大丈夫です」
真帆の親ももどってきて、しばらくティア子ちゃんと興奮気味にしゃべっていた。
くいなは真帆にたずねた。
「いつもここにくるの？」
「まあね。不登校だから、バードウォッチングくらいは参加しろってこと」
真帆はうきうきしている親をちらりと見て、くいなを見た。
「⑤じゃ、また会えるかもね」
「うん。また」
ふたりは、ぱちっとハイタッチした。

（長谷川まりる『呼人は旅をする』偕成社）

＊　真正――まちがいなく本物であること。

問い一、――線部①「ちょっとあやしい」とはどういうことですか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　呼人の人権に関する活動に、自分が興味を持つかどうかは疑わしいということ。
イ　呼人の人権に関する活動に、自分が興味を持つことは絶対にないということ。
ウ　呼人の人権に関する活動に、親が自分を誘ってくることが不思議だということ。
エ　呼人の人権に関する活動に、自分も興味を持てるようになる自信がないということ。

問い二、═══線部Ⅰ「物々しい」とⅡ「三々五々」の意味として最も適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

Ⅰ「物々しい」

ア　楽しげで明るい
イ　恐ろしくて緊張（きんちょう）する
ウ　重苦しくて圧迫（あっぱく）される
エ　いそがしくて落ち着かない

Ⅱ「三々五々」

ア　多人数がいっせいに行動すること
イ　少人数ずつ間をあけて行動すること
ウ　少人数と多人数にわかれて行動すること
エ　少人数と多人数とで交互に行動すること

問い三、空らん［　　］A～Dに入る適切な語句を次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度用いてはいけません。

ア　真剣（しんけん）な顔　　イ　うんざり顔　　ウ　きょとんとした顔　　エ　緊張したような顔

問い四、――線部②「どんなに機嫌が悪くても、くいなはそれを前面に出して、大人たちをおびえさせたりはしない」とありますが、「くいな」がこのようなふるまいをする自分を簡潔に表現した語句を本文中から七字で探し、ぬき出して答えなさい。

問い五、――線部③「おたがい大人にふりまわされてるねえ」について、次の(1)・(2)に答えなさい。

(1)「真帆」と「くいな」それぞれにとっての、「大人」とは誰ですか。本文中からぬき出して答えなさい。

(2)二人を「バードウォッチング」に連れてくるそれぞれの「大人」の目的は何ですか。それぞれ十五字程度で答えなさい。

問い六、――線部④「ちょっと意外だ」とありますが、どのようなことを「意外だ」と感じたのですか。次の中から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア　二十万年前、人間の先祖は狩猟採集をしながら生活していたということ。

イ　二十万年前、人間の先祖が現代人と同じ状態に進化していたということ。

ウ　二十万年前、人間の先祖は現代人よりも体力があり頭がよかったということ。

エ　二十万年前、人間の先祖はほかの動物と同じように森で暮らしていたということ。

問い七、空らん【　　】Xに入る語を本文中から二字でぬき出して答えなさい。

問い八、――線部⑤「じゃ、また会えるかもね」とありますが、「くいな」にとって、「真帆」はどのような存在だったからまた会いたいと思っているのですか。三十五字以上四十五字以内で答えなさい。

四、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。ただし、字数制限のある問いに答える場合、「、」や「。」等も一字と数えます。

古代の日本にも話し言葉はありましたが、文字はありませんでした。［　A　］政治には記録として文字を用いる必要がありましたから、中国の漢字と漢文を輸入して使っていたのです。律令制度のもとでは、行政のしくみや法律、税制など、すべて漢字によって運営され、それゆえ＊官僚（かんりょう）貴族にとって漢文を自在に使いこなせる能力は必要不可

欠でした。

ですが、生活の中の言葉は中国の言葉とは違います。そこで、日本の言葉を文字にするために、平安時代になると、漢字に加えて①仮名が作られました。仮名とはひらかなとカタカナです。②漢字はそれぞれの字に意味がある表意文字ですが、その部首やくずし字などを使って作ったのが「かな文字」でした。発音を表わす表音文字です。

日本人が漢字とかなの二種類の文字を得たことは画期的でした。平安時代からさかんになる物語や和歌はそこから生まれた文化です。『源氏物語』や『枕草子』、そして『古今和歌集』から『新古今和歌集』、西行の『山家集』などは、当時の貴族や上流階級の人々の感情や思想がひらがなの力を存分に活用して書かれています。＊説話物の『今昔物語集』や＊軍記物の『平家物語』『太平記』などは、ひらかなやカタカナに漢字を交えた書き方でダイナミックな歴史の世界を描き出しており、日本人の歴史好きという風潮へとつながっています。

B、江戸時代には、武士や庶民の間にも＊滑稽で＊機知のきいた句を連ねて詠む＊俳諧連歌が流行しました。その＊発句である五七五だけを一句とした俳諧が元禄期の松尾芭蕉からはじまり、現在の俳句へと受け継がれています。③風刺を込めた狂歌や川柳も根強い人気を得ました。そこには世の中や権力に対する風刺という力も発揮されていました。

世の中に蚊ほどうるさきものはなし　ぶんぶぶんぶと夜もねられず

白河の清きに魚も住みかねて　もとの濁りの田沼こひしき

これらは老中松平定信によって行なわれた「寛政の改革」（１７８７～９３）のきびしい取り締まりを風刺した狂歌です。作者は＊大田蜀山人だとかつてはいわれていましたが、現在では不明とされています。しかし、言葉には風刺の力があることをよく示しています。松平定信の前の田沼意次の時代には＊賄賂が流行ったことで知られていま

すが、

役人の子は　にぎにぎをよく覚え

と、江戸時代にも賄賂が有効であったことを風刺する川柳もありました。

文学的な評価などかまわず気持ちをストレートに言葉にし、庶民がいろいろな不満をぶつけられるのも言葉の力でしょう。古くには１３３４年頃の建武政権の混乱ぶりを風刺した「此頃都ニハヤル物　夜討、強盗、謀綸旨、（中略）、天下一統メヅラシヤ　御代ニ生レテ　サマザマノ事ヲミキクゾ不思議共　京童ノロスサミ　十分ノ一ゾモラスナリ」という＊「二条河原の落書」の例も知られています。

もうひとつ、日本語の言葉がその力を発揮しているものに「ことわざ」があります。時には学校で習うむずかしい勉強よりも、生活のさまざまな場面で知らず知らずのうちに覚えていて発せられることわざの方がずっと役に立つこともあります。古くから伝えられている生きていく上での知恵を教える短いひとことは、まさに言葉の技ともいえます。

C　、健康に毎日を過ごすには「早起きは三文の徳」、日々の心構えとしては「笑う門には福来る」、仕事を進める上では「急がば回れ」、材料や用具などを選ぶときには「大は小を兼ねる」、情報を得るには「百聞は一見に如かず」、相手に腹が立ったときでもすぐにカッと怒りを顔に出さないための「短気は損気」、自分が＊傲慢になっていて相手を傷つけるかもしれない時には「【　a　】」、その逆に圧迫で苦しい時の自分を勇気づけてくれるのもその「【　a　】」です。他にもたくさんありますが、いずれも、その時々の場所と場合によって役に立ってきた言葉の力があるからこそ、いまに至るまで伝えられているといえるでしょう。

……（中略）……

日本語の特徴は、それがひらかな言葉であるということ、そして④抽象的な概念をあらわす名詞がないということです。たとえば梅や桜、花もですが、それらは具体的な物であり、ひらかなでも漢字でも名詞としてあらわせます。しかし、それらの「きれい」とか「美しい」という抽象的な概念としての「美」という名詞は漢字になります。古代の政治権力を行使していった日本人はたとえば租税とか年貢など抽象的な概念としての名詞を漢字やその熟語であらわすことで、それらが効率的であることを学んで漢字熟語をどんどん使っていったのでした。

……（中略）……

古代からつづく政治権力の行使とそれを＊理念的に支える儒学や仏教の世界では、それまで日本語になかった言葉と概念を、漢字の習熟によって学んでいき、また日本語にあったひらかな言葉を漢字で抽象的な概念として表現していきました。勉学を通して、漢字熟語や、近代以降は英語やフランス語を自分のものとし、その抽象的な概念と言語を駆使して自分たちの考えを主張し人々を納得させてきたのが、知識人であり、政治家や経営者や学者たちであり、かれらが社会のエリートとなっていきました。

政治・経済・文化の各分野では名詞の＊学術用語が必要不可欠です。学術の研究の上でも、それぞれの理論を提示するのは名詞であらわす概念です。⑤ひらかな言葉で生活してきた人々の間では、残念ながら、なかなか学問や研究が発達することが困難でした。一般の人たちの生活の中の知恵や知識は、だからこそ、前述したようなことわざなどを通して普及していたのです。

江戸時代までの漢字の熟語、明治時代以降に英語やフランス語、ドイツ語も加わり、それらの名詞と概念を駆使することによって、日本でも学問が発達しました。⑥現代の国際化社会においては、漢字の熟語よりもむしろ英語を中

心として膨大な量の言語が流通しています。カタカナ語の＊蔓延です。そのような中で、私たちが使う日本語がどのように変化していくのか、残り伝わっていく言葉、新しく生まれてくる言葉、それが人々の生活にどのように影響していくのか。また、意味もわからないままに流行しているカタカナ語も今の日本には多くあります。それらの現象も併せて観察し、分析していくことも、民俗学の役割でしょう。

（新谷尚紀・岸澤美希『民俗学で考える』ＫＡＤＯＫＡＷＡ）

＊官僚――国の政治に深くかかわる仕事をしている人々。
＊説話物――人々の間に語り伝えられてきた話をまとめた文学作品。
＊軍記物――戦を題材にした文学作品。
＊滑稽――ばかばかしくおかしいこと。
＊機知――とっさに働くするどい知恵。
＊俳諧連歌――和歌の五七五と七七をかわるがわる複数の人がよむ連歌のなかで、笑いやおかしみのあるもの。
傍線部③にある「狂歌」や「川柳」も同様に笑いやおかしみのあるもの。
＊発句――連歌の最初の五七五の句。
＊大田蜀山人――江戸時代後期の狂歌作家。
＊賄賂――自分に有利なようにはからってもらうために贈る不正な金品。
＊「二条河原の落書」――事件や役人の不正が多い世の中や政権を批判した落書き。
＊傲慢――思い上がっていばること。
＊理念的に支える――ここでは、政治を行う際の理想として、儒学や仏教の考え方があったということ。
＊学術用語――ある特定の学問において通用する専門用語。
＊蔓延――広がること。

問い一、空らん［　　］A～Cに入る語として適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度用いてはいけません。

ア　しかし　　イ　だから　　ウ　たとえば　　エ　また　　オ　そこで

問い二、――線部①「仮名」が作られた理由を説明した次の文の空らん〈　　〉Ⅰ・Ⅱに入る語句を、本文中から五字以上十字以内でぬき出して答えなさい。

輸入して用いていた〈　Ⅰ　〉では表現できない日本の〈　Ⅱ　〉を表現するため。

問い三、――線部②「漢字はそれぞれの字に意味がある表意文字」とあるように、漢字には意味を表す部首が含まれます。例えば、「池」という漢字の部首は左側の「シ」で、「さんずい」という名称があり、「水に関係するもの」という意味があります。では、次の1、2の漢字に共通する部首の名称は何ですか。また、その部首は何に関係するものを表していますか。それぞれ答えなさい。

1　読　記　議　論

2　腸　胸　腹　脳

問い四、――線部③「風刺をこめた狂歌や川柳も根強い人気を得ました」とありますが、なぜですか。その理由がふくまれる一文を本文中から探し、はじめの五字をぬき出して答えなさい。

問い五、二ケ所の空らん【　】aに入る「ことわざ」として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　一寸の虫にも五分の魂（たましい）　　イ　泣きっ面（つら）にはち

ウ　口は災（わざわ）いのもと　　エ　朱（しゅ）に交われば赤くなる

問い六、――線部④「抽象的な概念」とありますが、本文中では「具体的な物」として「梅」、「桜」、「花」があげられており、「抽象的な概念」として「美」があげられています。それらの例をふまえて、ここでいう「抽象的な概念」の説明として最も適切なものを次の中から選びなさい。

ア　中国から伝わってきた、もともと日本にはない考えや気持ち。
イ　学者や知識人が研究する中で抱く、深い考えや気持ち。
ウ　はっきりとした形のない、目には見えない考えや気持ち。
エ　とても難しく、理解するのに時間がかかる考えや気持ち。

問い七、――線部⑤「ひらかな言葉で生活してきた人々の間では、残念ながら、なかなか学問や研究が発達することが困難でした」とありますが、なぜですか。「抽象的な概念」という言葉を用いて、理由を四十字程度でまとめて答えなさい。

問い八、次の文の中から、本文の内容と合っているものを一つ選び、記号で答えなさい。
ア　漢字とかなの二種類の文字を得たことで、漢文を自在に使いこなせるようになった。
イ　漢字にたよらず、かなのみで書かれた説話物は、庶民にも読みやすかったため世間に広まった。
ウ　古くからある生きていくための知恵を簡潔に伝えるという意味で、「ことわざ」は言葉の技と言える。
エ　英語やドイツ語やフランス語から生まれたカタカナ語は、限られたエリートにしか理解できない。

問い九、――線部⑥「現代の国際化社会においては、漢字の熟語よりもむしろ英語を中心として膨大な量の言語が流通しています」とあるように、言語はその時代の社会のあり方によって変化するものです。これからの日本は、日本語を母語としない外国人の割合が大幅（おおはば）に増えると考えられています。ではあなたは、そのような社会の変化によって、日本語がどのように変化する、あるいは変化するべきだと考えますか。変化する原因と、変化の具体的内容を簡潔に答えなさい。